オウム対策住民協議会ニュース

第35回 抗議デモ・学習会

11月11日（土）

●抗議デモ　午後1:30集合 1:50出発　烏山区民センター前広場
●学 習 会　午後2:30開会　烏山区民センターホール

講演 「地下鉄サリン事件の被害は続いている」

―被害者・被害者家族へのアンケート調査から見えること―

講師は、悲嘆や惨事ストレスの研究者であるが、地下鉄サリン事件被害対策弁護団からの依頼を受け、2014年に同事件の被害者や遺族に対する調査を行い（有効回答317名）サリンの直接的な後遺症だけでなく、周囲の対応がストレスを悪化させていること等が明らかになった。科学兵器テロの被害が20年も続いている現状を報告し、その残酷さを説明する。

烏山地域
オウム真理教対策
住民協議会

講師：松井 豊氏（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）

略歴

1954年3月24日生まれ　63歳
1985年3月　東京都立大学人文学人文科学研究科博士課程修了
1989年7月　文学博士（東京都立大学）取得
国立大学法人筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
日本心理学会東日本大震災復興支援特別委員会委員長
東京消防庁惨事ストレス対策に関する専門指導員
総務省消防庁 緊急時メンタルサポートチーム 委員
南関東居住者の東日本大震災への募金に及ぼす共感の影響 心理学研究
東日本大震災で被災した自治体職員の急性ストレス反応 ストレス科学研究

主催：烏山地域オウム真理教対策住民協議会　　後援：世田谷区

署名活動へのご協力ありがとうございました

今年4月より始めた、観察処分期間更新の署名活動は、9月末日で終了いたしましたが、署名は10月に入っても皆さんから寄せられ、未だ集計中です。9月末現在の集計では45,815筆と、目標を5815筆上回ることができましたが、これは「オウム真理教はいらない」との、ひとり一人の皆さんの思いが集約された結果です。ご協力いただきました皆さまに改めてお礼を申し上げます。観察処分期間更新の署名活動は2003年以来6回目となりますが、今回は当初から困難が予想されました。オウム真理教による、地下鉄サリン事件から22年という長い年月は、マスコミによるオウム真理教報道の減少へとつながり、国民からオウム真理教への関心を一層奪っていきました。それは大学生や青年からも、オウム真理教を知る機会を閉ざすことにもつながりました。さらに、オウム真理教後継団体（アレフ・ひかりの輪）の活動も、表面上は「穏健」を装い、外部からはその動静をうかがい知ることが難しくなってきました。地域住民の中でも「オウム真理教はまだいるの？」との認識の人も少なくありません。上記のような状況がありながら、今回45,815の筆数が集まったことに、内心ほっとすると共に、これまで17年間継続してきた住民協議会活動に確信を持つことができました。大きな支えとなった世田谷区町会・自治会総連合会始め、各種団体の皆さまのご支援ご協力は、住民協議会に大きな励ましとなりました。今回の活動で特筆すべきは、地域のお祭りやイベント、街頭での署名活動で、これまでの実績以上の協力が得られたことです。どの会場でも、住民協議会会員の呼びかけに賛同の意思を示し、快く署名・募金に応じてくれる人が目立ちました。今後法務省、公安審査委員会などに要請行動を行いますが、その際に皆さまから寄せられた署名を渡してまいります。

烏山地域に居住する、オウム真理教後継団体ひかりの輪（上祐派）の信者は少数となりましたが、絶えず何かをたくらんでいる団体で油断できません。解散・解体を目指し活動を続けていきますので、これからもご支援のほどよろしくお願いいたします。

ひかりの輪に観察処分取り消しの判決

平成29年9月25日東京地方裁判所において、「無差別大量殺人行為を行った団体の規制に関する法律」（団体規制法）に基づく観察処分更新の決定に関して、アレフ及びひかりの輪が求めた取り消し訴訟について、ひかりの輪に対する観察処分を取り消す判決が出されました。

オウム真理教対策住民協議会としては、この判決は受け入れられない。今後も、観察処分の更新に向けて区と連携して、取り組んで行きます。

監視小屋だより

住民協議会活動の大きな柱となっているのが監視活動です。現在は36の団体の皆さんが年間のローテーションを組み、オウム真理教の信者たちの動向を日誌に記録しています。

〈日誌より抜粋〉

- 男性1人と警察の方が話をしていた。何かあったのか聞いたが「大丈夫です」とのこと。
  なにが？と思ったがその男性は2階の右から2番目の部屋に入った。公安詰所、南烏山警察詰所にも人は見られず。行政の方も含め監視していたころを思うと時の流れを感じた。
- 上祐が帰宅した。障がい者マークのついた車で、近くで一旦停まると気付いてでもほしかったのでしょうか、クラクションを鳴らした。直後にパトカーが着いて運転手の方と少し偉い感じの方、駐在さん、公安の方2人、計5人で話をしていましたが、特に困ったことではない様子。今は7人の信者、今日は1人外出中とのこと。
- 右端の部屋から女性が7人、左端の部屋へ移動。もう１人の女性も同じ頃に移動。
- 左端の部屋から髪の長い眼鏡をかけた女性が出て、車から米と野菜を持って元の部屋へ。
  2回目は男性と取りに来た。米を2袋と玉ねぎ、他に中身が見えないように周りを新聞紙でかくしているスーパーの大きな袋５袋。
- 男女10数名で立入検査。警察、公安が待機。1時間後に戸別検査を始める。2名1組で監視要員多数の為か、目立った動きなし。
- 左側黄色のドアの部屋に40代の男性が訪問。数回ドアのベルを鳴らしようやく中からドアが開き入って行った。
- 下高井戸から来たというメガネの男性がオウム真理教のマンションはどれですか？と見に来ました。

烏山施設のオウム真理教「ひかりの輪」の信者は数名となり、監視小屋日誌には「動きがない」「静か」等の記入が目立ちます。しかし「ひかりの輪」代表の上祐は地方へ出向き、信者獲得を目的とした布教活動を頻繁に行っています。多くの犠牲者を出した危険な宗教団体である事を私たちは忘れてはいません。

住民協議会は、今後もオウム真理解散・解体に向け活動を続けていきます。皆さんのご協力、ご支援をお願いします。

地下鉄サリン事件で4年後にうつ病発症 ― 被害者男性、通勤災害と認定 ―

地下鉄サリン事件の被害に遭い、4年後にうつ病と診断された60代の男性について、地方公務員災害補償基金東京都支部審査会が6月「事件でうつ病を発症したと考えるのが相当だ」として、通勤災害と認定したことが18日分かった。1995年3月に起きた地下鉄サリン事件の6000人を超える被害者には、現在も心身の不調を訴える人が少なくない。男性の代理人弁護士によると、事件から時間がたって出た症状が、通勤災害と認められるのは異例という。代理人や主治医によると、病院職員だった男性は、地下鉄日比谷線小伝馬町駅で被害に遭い、4日間入院。職場復帰したが、目が見えにくい、疲れやすいなどの症状に悩まされた。99年にうつ病と診断された後、入院するなどして早期退職を余儀なくされた。2008年に通勤災害の申請を申し立てたが、因果関係が不明として認められず、15年に不服として審査請求。主治医がサリンの後遺症にかんする追跡調査の結果などを提出したところ、今年6月に認められたという。男性の主治医で日本医科大学の大久保善朗教授は「サリンの後遺症が慢性化し、うつ病に発展したと証明できたことが、認められた理由だろう」と話している。被害者の健康調査を続けるNPO法人「リカバリー・サポート・センター」によると、事件から20年たっても、アンケート回答者の半数以上が「体が疲れやすい」「目がかすんで見えにくい」などの症状を訴えているという。

「時事ドットコムニュースより転載」

2014年松本サリン事件、2015年地下鉄サリン事件の負傷者は、併せて約6500人死者は21人を数える。サリン特有の、年数の経過が病状を一層重篤にすることに見られるように、多くの負傷者が人知れず苦しんでいる現状がある。既報のように、第35回の学習会では負傷者の現状についての講演があります。

住民協議会活動報告

９月23(金)･24日(土)　烏山神社秋祭りで募金活動	10月２日（月）　編集会議協議会ニュース169号再校正
９月25日（月）　編集会議協議会ニュース169号初校正	10月４日（水）　事務局会議
９月26日（火）　実行委員会	10月11日（水）　協議会ニュース169号発行

協議会ホームページアドレス　http://www.kyogikai.jp

この協議会ニュースは、皆様の募金により発行されています。

本紙についてのお問い合わせ：世田谷区南烏山6-22-14　烏山総合支所内住民協議会　電話 03（3326）1202・FAX 03（3326）1050